

1. 略歴

- 1994年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1996年4月 東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学（国文学）専修課程進学
1998年3月 同 卒業
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程入学
2001年3月 同 修了
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程入学
2006年3月 同 単位取得退学
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程再入学
2010年3月 同 退学 2010年7月 博士（文学）学位取得（東京大学）
2011年4月 ノートルダム清心女子大学文学部 専任講師
2014年4月 ノートルダム清心女子大学文学部 准教授
2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世文学・和歌文学

b 研究課題

日本の中世文学・和歌文学の研究を専攻している。特に平安時代後期から中世にかけての言説を研究の中心とし、鴨長明の諸作品（『方丈記』『無名抄』『発心集』）と和歌・歌学書・歌論書を主たる分析対象とする。核となる問題意識は、言葉がどのような世界をつくりだすのか、何を実現するのかということにある。その現場を、表現が巧まれる必然性・言説の主体や文化圏の価値観や構想という視点から分析し、特に中世前期における人と言葉の有り様の解明を試みる。言葉によって世界が構築される事例として、新古今時代を描出する『源家長日記』の分析を進めている。また、中世における紀行文隆盛の基底として、巡礼記や和歌を伴う旅の記・物語といった作品群に着目し、旅・移動をめぐる言葉の動態を表現史・文学史として把握することを目指している。

c 概要と自己評価

鴨長明の諸作品を軸とした研究については、単著『鴨長明研究——表現の基層へ』（2015）にまとめたが、その過程で醸成した新たな問題意識をもとに、引き続き、『方丈記』についての論考を発表した。『方丈記』については、現在の社会情勢との関係も相俟って、国際的にも需要が大きい作品となっており、災害観の視点からの考察を進めることで、『方丈記』という古典が広く享受される文学史的必然性を解明し、現代における古典文学の意義を再考することにつながると考えている。また、近年の研究課題としている旅・移動をめぐる作品群の研究の一環として、『南海流浪記』『東関紀行』についての分析を進めた。

d 主要業績

(1) 論文

- 木下華子、『方丈記』「養和の飢饉」に見る疫病と祈り、ロバート・キャンベル編『日本古典と感染症』、68-91 頁、2021.03
木下華子、「高野山大学蔵（金剛三昧院寄託）『南海流浪記』の翻刻と紹介」、『東京大学国文学論集』、16、123-139 頁、2021.03
木下華子、「早蕨巻の時間意識——回帰する時間・直進する時間」、『源氏物語を開く 専門を異にする国文学研究者による論考 54 編』、603-614 頁、2021.3
木下華子、『東関紀行』における旅の造型、『東京大学国文学論集』、17、37-53 頁、2022.3

(2) 啓蒙

- 木下華子、「不思議なる災害観」、『跨境：日本語学研究』、12、4-7 頁、2021.6

(3) 研究発表

- 木下華子、「中世日本文学と感染症—『方丈記』『徒然草』を中心に—」、台湾大学日本研究センター主催・国際学術フォーラム「ポストコロナ時代を考える日本研究—人文学と社会科学からのアプローチ—」、2021.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

清心女子大学非常勤講師、2021.4～2022.3

(2) 学会

中世文学会常任委員（2020、2021 年度）

和歌文学会委員（2021 年度）

西行学会常任委員（2021 年度）

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

筑摩書房教科書編集委員（2020、2021 年度）